

農具便利論（農具の図鑑）

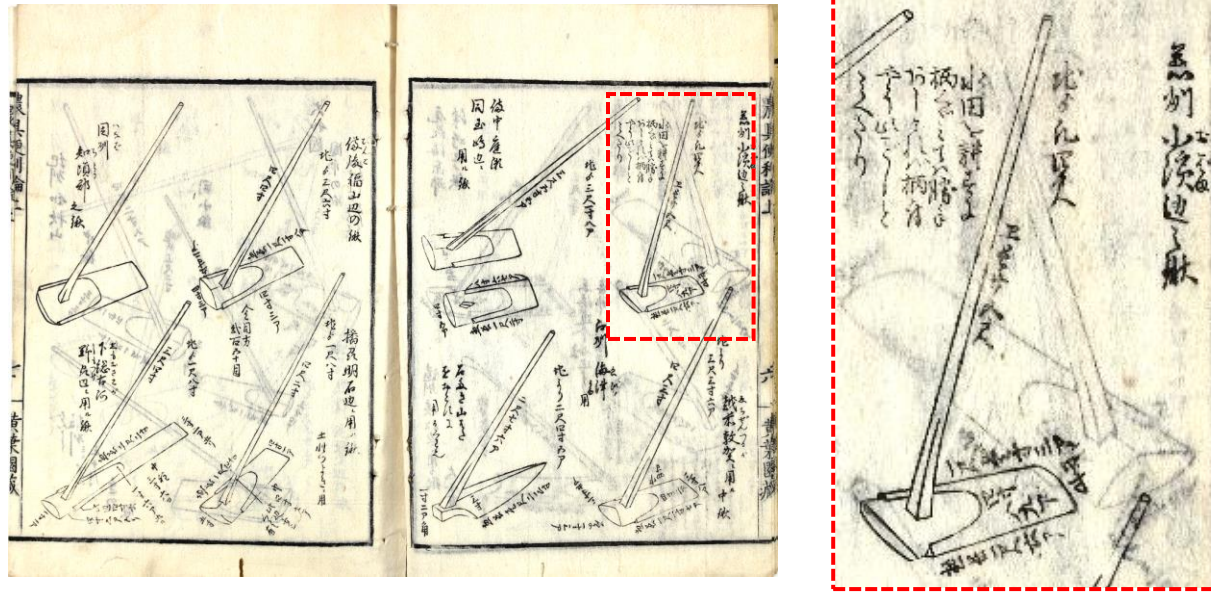


図1 諸国の鋤の図（右図は拡大図） [デジタルアーカイブへ](#)
 ※画像の出典はいずれも「農業全書（上、中、下）」（坂井高等学校文書（松平試農場旧蔵））

解説

江戸時代に農業技術は著しく発展しました。農具についてみると、鉄製の農具である深耕用の備中鋤、脱穀用の千歯扱が工夫され、選別用の唐箕や千石筵、灌漑用の踏車などが考案されて、村々に広く普及しました。また綿などの商品作物生産が発達したところでは、遠隔地からの干鰯・麦粕・油粕・糠などが金肥として普及しました。

これらの新しい技術を普及させるための農書も出版されました。17世紀末には、宮崎安貞の『農業全書』が、19世紀には大蔵永常の『農具便利論』や『広益国産考』が刊行されるなど、地域の実情に応じて農書が多数つくられ、広く読まれました。

福井とのかかわり

1837年（天保8）、大火の際に焼失した農具をまとめた大飯郡上下村（現おおい町）の記録によると、千歯扱や唐箕、唐臼（土臼）等も多数の百姓が所持しており、この頃までに新しい農具がかなり普及していることがわかります。

鋤については『農具便利論』の中で「若州小浜辺之鋤」「越前敦賀ニ用ル中鋤」が掲載されています（図1）。特に小浜近辺で用いられていた鋤は柄の長さが五尺（約1.5メートル）あり、他の鋤と比べて非常に長くなっています。補記には「水田を耕すのに、柄が折れ曲がると使いにくいのでこのようにした」とあり、地域の土性に応じて特色ある鋤が使用されていたことがわかります。

資料の注目ポイント

『農具便利論』は1822年（文政5）の初版発行以降、何度も版を重ね、明治期になっても多くの人々に読まれるベストセラーとなりました。絵が豊富に用いられており、全体的にやさしい文体で書かれているのが特徴です。農具の図には、細かな寸法や重量が記されており、本書を参考に読者が実際に農具を製作できるような配慮がなされています。

また、実際に農具を用いて農作業をしている風景も多く挿入されています。例えば千歯扱（麦扱）の図（図2）では、男女3人が横に並んで脱穀の作業しており、子どもが手伝いをしている様子もみえます。別ページには「便利な農具で労力が軽減されれば、女性や子どもも農事に参加することができる」と書かれており、著者である大蔵永常の合理性を垣間見ることができます。

図3は天明年間（1781～1789）にオランダから輸入した「ブランドスポイト」という揚水機で、銅山の排水で使用されたと記述されています。永常は蘭学を学んでおり、その知識が農具にまで適用されていたことがわかります。



図2 麦扱の図 [デジタルアーカイブへ](#)

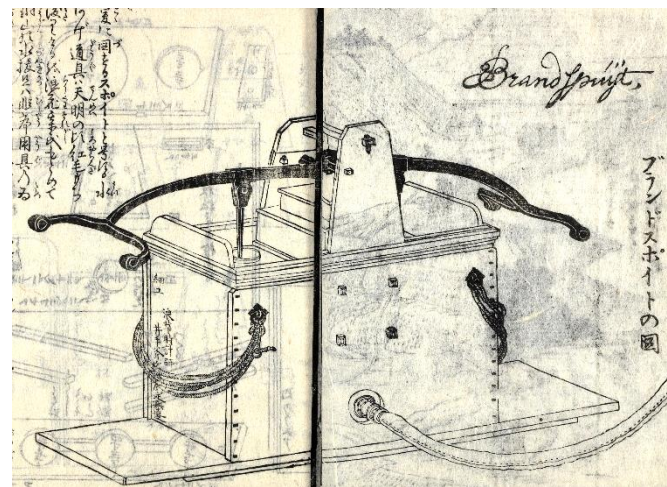


図3 ブランドスポイトの図 [デジタルアーカイブへ](#)

関連資料、展示等

名称	概要	備考
農具便利論（上、中、下）	坂井高等学校文書（松平試農場旧蔵）（当館蔵） 資料番号 C0130- 00094～00096	デジタルアーカイブ福井で閲覧可能。 （上巻） https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-2764821-0 （中巻） https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-2764822-0 （下巻） https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-2764823-0
「お城のあとが果樹園に！～松平試農場の記録と蔵書～」	「農具便利論」を展示。	当館 WEB で公開中。 https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/08/2021exhb/202106m/20210625m.html

参考文献等

『日本農書全集 15』（1977年 農山漁村文化協会）

『福井県史 通史編 4』（1996年 福井県）

『日本農業史』（木村茂光 2010年 吉川弘文館）

『現代に生きる大蔵永常－農書にみる実践哲学－』（三好信浩 2018年 農山漁村文化協会）